

積上式経筒に関する一考察

A Study on the Ring-stacked Sutra Case

村木二郎

MURAKI Jiro

はじめに

- ① 積上式経筒の研究史と問題の所在
- ② 四段積上式経筒の規格性と埋納法
- ③ 特殊事例としての原山寺1号経筒
- ④ 国立歴史民俗博物館所蔵の四段積上式経筒

まとめ

【論文要旨】

浄土教の広まりとともに、12世紀を中心に全国各地に経塚が造られた。経塚からは経筒をはじめとした各種の埋納品が出土するが、それらの検討から経塚とは中央の文化が同心円的に広がったものではなく、各地で多様な展開をしたことがわかっている。なかでも北部九州は全国的に見ても最も経塚が集中的に造られ、独自の展開をした注目すべき地域である。多数出土している青銅製経筒のなかでも代表格である積上式経筒は、大宰府を中心に九州全域から出土している。複数のパーツからなる複雑な経筒で、相輪鈕を頂く蓋、筒身、台座を組み合わせて塔形をなす。筒身は輪積みになっており、2段、3段、4段のものがあり、とくに四段積上式経筒が圧倒的に多い。

九州の主要な経筒型式は、四王寺型経筒と積上式経筒の2種類の広域型経筒で、前者から後者へと変化する。その過渡期である1120年代に個体差の大きい二・三段積上式経筒が出現し、非常に規格性の高い四段積上式経筒に収斂する、というのが従来の考え方であった。しかし白山神社経筒に1109年の紀年銘が新たに発見されたことで、考えを改める必要が生じた。

本稿では、二・三段積上式経筒を四段積上式経筒の亜種として一過性の型式とし、従来の考えを修正して白山神社経筒を位置付け直した。そのうえで四段積上式経筒の口径の大きさや、積上式経筒の埋納方法を検討することで、四段積上式経筒の本格的な展開は12世紀第2四半期にあり、四王寺型経筒を外容器に入れて土坑に埋納する方式から、四段積上式経筒を石室に直接納める方式へ変化するという、九州の経塚の大きな流れを改めて確認した。

また資料の充実化を図るため、新資料を紹介してその位置付けを示した。

【キーワード】 経塚、積上式経筒、白山神社経筒、村上経筒、四王寺型経筒